

【史料紹介】

木曾を詠んだ詩歌と地名歌、地名句 —木曾の観光の基礎的文獻—

楯 英雄

1 詩歌のふるさと木曾

木曾は中世の都の貴族、僧侶等の文化人によって、「歌枕」（風景歌）として歌われている。

木曾の麻衣（あさぎぬ）、木曾のかけはし、木曾の風越（かざこし）山、寢覚の床である。これらの「歌枕」は、京都の文化人が木曾まで旅したのでなく、木曾の美しい名勝地を入れて歌に詠んだだけのものである。

木曾谷の景勝地が現実的に知られ、歌に詠まれるようになったのは一五八〇年代以降のことで、江戸時代に入って、中仙道が五街道として整備されてからである。

俳句が新しく加わるのは、松尾芭蕉の更科紀行の貞享5年（一六八八）以降のことである。

地元でもほとんど知られていないものに「川柳」がある。その題材となったのは、源平の戦乱期に、木曾で育った源（木曾）義仲である。それも「木曾殿」としてで、田舎者の代名詞としてである。木曾義仲の川柳は江戸時代後期の流行である。

明治時代、国鉄中央本線が全通する明治44年以前、木曾を歩いて東京、大阪、京都などの都市を旅する者が紀行文や詩歌を残している。

その代表者として作家幸田露伴がおり、露伴は明治21年冬の木曾路を歩き、名作『風流伝』（ふうりゅうぶつ）を著している。

正岡子規が木曾路を歩いたのは明治24年6月のことで、『かけはしの記』を残している。子規は24年の旅を元に、翌明治25年漢詩『岐蘇雜詩三十首』をあらわしている。

子規の高弟で子規俳句の忠実な継承者、高浜虚子は、明治27年、『木曾路の記』を残している。この『木曾路の記』は、子規の『かけはしの記』が紹介されているのに、子規の高弟で俳句の世界で著名な高浜虚子の『木曾路の記』は取り上げられていない。

以後多くの歌人、俳人、詩人。そして作家、画家が国鉄開通後木曾を訪れ多くの詩歌を発表、刊行されている。

木曾の景勝地、風光がどのような形で、風景歌、風景になっっているかを紹介し、これらの詩歌を広く紹介したい。

2 木曾の北隣塩尻の人々が詠んだ木曾

塩尻市は国鉄中央西線、現在のJR東海の中央西線、国道19号線で木曾と深く結ばれ、平成の大合併で旧木曾郡榑川村が塩尻市に編入された。信濃川の源流の奈良井川も深くかかわり、塩尻市洗馬地区には奈良井川の河岸段丘が発達している。塩尻市の「ぶどう」

の生産地「桔梗ヶ原」は奈良井川右岸の洪積層の河岸段丘である。奈良井川周辺の地を歌人たちは「木曾口」の地名を入れて作品としてている。

木曾口より冬は足早にやってくる母の味なるすんきも出来つ

畑中千代 歌集『槌の音』 平成19年

木曾口にかぐるく立ちて一峰の北に備へし山城かこれ

蒲美實 歌集『閃めく風』 平成元年

木曾口の紅葉なだれ落つること

椎名康之 句集『聴診器』 平成8年

木曾口の水叩きけり雁渡し

中島畦雨 句集『鳩』 昭和57年

千曲川夜の瀬音は木曾口に住みいく年の夢に入るらむ

酒井仙影 歌集『桔梗ヶ原』 昭和51年

渡鳥はざまを越えてつぎつぎと雲間にきゆる木曾の秋のそら

奈良井新也 『地名俳句歳時記4 甲信』

岐蘇山道抜けて開けし信濃なる崇賀の郷ここに見はるかすなり

武居才吉 『地名俳句歳時記4 甲信』

木曾谷は紅葉に埋まり仰ぎ見る峡の青空ますます深し

丸山健三 『読売』 平成18年12月12日

茫々と木曾の夕立谷より来

倉科繁登 『市民』 平成22年8月19日

3 旧木曾郡榑川村

旧榑川村は木曾郡でも、日本海へ注ぐ信濃川源流の村である。

塩尻市の蒲美實氏が「ここよりは木曾路」と誌す文字の碑に日和

り楽しく脚運びいづ」と詠われているように隣接している。平成の合併で塩尻市に編入村の名は消えた。

○ 木曾で唯一の集団移住した桑崎 ○

桑崎は贅川駅の東、木曾山脈山中にあった集落で昭和42年17軒が集団移住で村が失われている。同じ昭和40年代、木曾山脈山中の飯田市松川入。同大平（おおだいら）が集団移住をしている。

廃屋の母の生家に栗が咲く

中山雪水 句集『享保雛』 平成22年

この句は中山雪水さんの母（旧姓長島緑、大正2年桑崎生）を偲んだ句である。

○ 木曾漆器の町平沢 ○

空青き木曾のはさまの蔵籠りひた研ぎいでし堆朱（ついしゆ）の光り

川上みよ子 歌集『野のかおり』 平成17年

塵置かぬ蔵に籠りて漆塗るその終日（ひねもす）は厳しきものか

蒲美實 歌集『閃めく風』 平成元年

早逝の妹の漆器に貼られある美術展入賞の紙は褪せをり

洗ひ朱を深く抑へし乾漆の大鉢は妹の度量見せをり

畑中千代 歌集『槌の音』

さえづりや漆塗る手を休めざる

椎名康之 句集『聴診器』 平成8年

漆師蔵に人影動く夜なべの灯

漆師蔵の小さき窓や木の芽風

裏通り漆の桶に茄子咲かす

広田清子 句集『山動く』 平成10年

○ オリンピックの漆のメダル ○

木を素材のオリンピックの金メダルを漆で。このような提案を私は雑誌『木地師研究』（第74号別冊号、平成4年4月）に、「オリンピック長野大会の金、銀、銅メダルは日本の漆器で（案）」を提案し、オリンピック大会の事務局へ送った。漆器のメダル提案の最初である。詳細については省略するが漆器のメダルのブランド確立が目的であった。

木曾漆冬季五輪の胸飾る

中山雪水 句集『吉保雛』 平成22年

雪踏みてオリンピックのメダル見に

広田清子 句集『山動く』 平成10年

○ 木曾檜を素材とした奈良井宿の曲物 ○

奈良井宿だけの特産である「曲物」は木曾の伝統工芸の中で最も歴史の古いものである。木曾檜は江戸時代「木一本首一つ」の庄政で木曾山を支配した尾張藩が木曾の住民に出している。

奈良井宿の曲物は大切な産業として特別に交付され発達してきた。木曾檜は木曾の関係者にとって大切な生活資源であった。その貴重材の木曾檜で作った奈良井川にかかる橋について次のような歌がある

命より重かりし檜をふんだんに刻みて成し木曾の大橋

川上みよ子 歌集『野のかおり』 平成17年

奈良井宿の曲物は、観光客に知られているが曲物を詠んだ詩歌、

俳句は少ない。

曲物の看板あそぶ木曾の秋

多治見市 鈴木まさ子 『信濃俳句通信』 平成14年11月号

祖母父らに重宝されし曲げもののメンパ蒸籠仕舞はれしまま

市川静代 歌集『どこかで流が』 平成14年

○ 奈良井宿大宝寺のマリア観音 ○

マリア観音はキリシタン信者が禁制のなかひそかに信仰したとされる観音像である。江戸時代初期名古屋の尾張藩の弾圧でキリシタン信者が木曾谷に逃げ込んだとする歴史史観がある。

歌人木俣修の歌はこの伝承によるものである。

追はれたる耶穌の神父の指しゆきし木曾路は遠きいく山のはて

木俣 修 『うたの信濃』（草田照子著） 平成9年

禁制のマリア地蔵の抱ける児の手には十字の蓮の花あり

雨にぬれ奈良井の宿場マリア像首なく諸手に幼をだきて

名古屋市 古沢蒼生 歌集『柳 蘭』 平成4年

小雨降る宿場の寺の庭隅にマリア地蔵をわれはをるがむ

大宝寺と掲書あり

抱かれし幼とマリアの怪我深くかくれキリシタンのこころ沁みて来ぬ

長瀬修作 歌集『穂高岳』 平成9年

顔のなきマリア地蔵尊をさな子をひしと抱きて山陰におはす

寺裏の蓮（ふか）きに据えてと邑人の護り継ぎ来しマリア観音

首欠けてなお斎かる石仏に秘むる歴史は誰れも伝へず

川上みよ子 歌集『野のかおり』

すぐ裏にマリア地蔵のおはします奈良井宿に嫁ぎし義妹の五十年

双の手にしかと子を抱く首のなきマリア地藏に獅子舞のこゑ

市川静代 歌集『どこかで滝が』 平成14年

奥木曾の十字架の秘仏彼岸西風

大桑村 勝野五月 第5回鳥居峠俳句大会 昭和61年

首欠けのマリア観音風清し

塩尻市 広田清子 句集『山動く』 平成10年

4 後継者のいないお六櫛職人の世界

木曾で最も多くの句、歌に詠まれているのは木祖村数原のお六櫛で、その数は五〇〇句に近いのではないか。木曾における詩歌で最も多く詠まれている。

このことは、地場産業、伝統工芸で最大であったことを物語っている。ところが高度な技術を持った、櫛職人はわずかに2人。70代〜80代。村も10年にわたって後継者育成事業を行ってきたが、技術は先人に遠く及ばない。

○ 櫛職人青柳和邦さんが作った俳句 ○

昭和50年代青柳さんの仕事の場の壁に、広告の裏にかかれていたものをいただいできた。10年以上も貼られていたので、茶褐色になりよく捨てられなかったものである。

そよ風の誘いに乗れず櫛作り

雪深く櫛板乾かす音堅(かた)し

櫛を挽く手もと見つめる蓮華草

櫛の歯を挽けぬ日もあるすき間風

うぐいすの声より遅く櫛けずる

○ 美智子皇后の額櫛を作られた青柳さん ○

昭和天皇の即位式。雅子様、紀子様のご婚礼の際御三方の前髪の「額櫛」に菊紋の櫛がつけられている。これらの「額櫛」の木地を挽かれた方が青柳和邦さんである。次の2句はその時の歌である。

皇統は伝え伝えて百余代菊花の櫛と共に榮えて

紀子様は幸福多きを祈るなり額に光る櫛を作りて

5 広重の木曾海道六十九次を保管している木曾路美術館

東海道五十三次の成功のあと、出版元が刊行したのは、中山道六十九次である。ところが「中山道」とせず「木曾海道」としたのは、「木曾路」が当時の観光としては最大のブランドであったからである。

木曾路美術館の国道19号の南約2キロ圏内に北斎の「諸国瀧廻(めぐり)」の題材となった、小野の滝と隠れ滝がある。「諸国瀧廻り」は、八景しか描かれておらず、うち二景が上松町の滝が描かれている。

特に「木曾路の奥阿弥陀か瀧」(上松町の隠れ滝と想定)は北斎の作品のなかでも名画とされ、最近も『朝日新聞』(平成22年7月15日)で一面大で紹介されている。

この外広重の名作「雪、月、花」のうち、「雪」の「木曾路の山川」があり、木曾路美術館に収蔵されている。このような世界的名画、の存在を木曾の行政、観光関係者は知らない。このような北斎、広重の歴史的絵画の持っている文化的価値を最大限に活用、紹介をするべきである。

○ 広重の木曾海道六十九次と詩歌 ○

広重がこころ描ける道中画信濃本山簡素な構図

塩尻市 蒲美實 歌集『閃く風』

広重の木曾街道そのままに千本格子の並ぶ旅籠屋

塩尻市 川上みよ子 歌集『野のかをり』

広重の木曾深かり遅桜

長野市 中山雪永 句集『享保雛』

広重の橋吹き上ぐる春の雪

大桑村 田尻すみお 『信濃句集31号』 平成11年

広重の一川包む雪解靄

大桑村 田尻すみお 俳誌『黒 姫』第253号 平成11年

浮世絵のやうに駆け下り夕立中

中村壽郎 俳誌『りんどう』362号 平成9年

広重の「木曾路山川の図」はこれぞ雪に埋れて棧を柚人の行く

小野己代子 『檜山集』第16号 昭和50年

北斎の描きし浮世絵を眺めつつ歴史の中の静けさにゐる

村井 幸 『檜山集』第15号 昭和49年

広重と夕立であう須原宿

尾崎松兵衛

英泉の浮世絵残る伊那川橋

尾崎松兵衛

木曾銘酒木曾のかけはし野尻宿

尾崎松兵衛

広重も北斎も描いた小野の滝

林 長十

北斎が描いた木曾の隠れ滝

林 長十

北斎の奇想天外阿弥陀の瀧

松澤正兵衛

青と白水の幻想瀧廻(め)ぐり

松澤正兵衛

北斎が木曾で描いた瀧廻(め)ぐり

林 長十

6 隠れ滝と周辺の地名歌、地名句

北斎の「木曾路の奥阿弥陀の瀧」を私は上松町荻原の木曾川の対岸の隠れ滝を想定して描いたものと推定している。その理由は小野の滝も「諸国瀧廻り」で「小野の瀑布」として描かれていることと、「阿弥陀の瀧」の由来となった「阿弥陀堂」が、荻原の集落の木曾駒山系山中約2キロの場所に、「東野(とうの)」の阿弥陀堂があることである。

次に紹介する句集『仙境』は東野の阿弥陀堂を詠んだ句である。

かくれ滝のしぶきは虹と輝きてもみずる峽の空を彩る

遠山琴子 『檜山集』第24号 昭和58年

昨日降りし雨に濁れるかくれ滝水嵩増して今朝は見ゆるも

東野(とうの) 山青葉となりし白樺の梢鳴らして風渡りゆく

遠山琴子 『檜山集』第27号 昭和61年

木曾川を挟みて高き東野(とうの) 部落肥沢(ひざわ) 部落が

谷底に見ゆ

樋口 隆 『檜山集』第36号 平成7年 東野(とうの)に

て3句

高僧の筆に成る絵や露にぬれ

その昔(かみ)の落人の墓草の花

白露や名も藤原と大古家

倉上曉雲、倉上 季子 句集『仙境』 昭和63年

7 詩歌の舞台から疎遠になつた寢覚の床

「寢覚の床」は鎌倉、室町時代から戦後の30年代まで木曾路で

最も多くの旅人、観光客が訪れた景勝地であった。昭和40年代、木曽路の妻籠宿、馬籠宿、奈良井宿が日本の代表的な観光地となり、没落した観光地となってしまったことは否定できない。

しかし、美しい風景や名刹臨川寺があり、臨川寺には、歴史を物語る次の文学碑が建立されている。『木曽路と文学碑』（林好文、平成11年）から紹介したい。

昼顔に、ひる寝しようもの床の山

筏士に何をか問はむ青あうし

白雲や青葉若葉の三十里

おべんたうを食べて洗うて寢覚の床で

たび枕かり寝の三夜の夢

ねざめにかほる松風の音

谷川の音には夢もむすばじも

寢覚の床で誰が名つくうん

岩の松ひびきは波にたちはかり

寢覚の床ぞさびしき

永き夜の寢覚の床の秋更けて

紅葉流るる木曾川の水

木曽地区中国人強制連行捕虜殉難者供養等

山高うして天を競はず流れ遠くして／中国の諸士／労に服し或

いは難に殉で／数二百を越ゆ傷ましきかな

木曾仏教会

中川恭次郎

近衛撰政

鳥丸光栄

山頭火

正岡子規

横井也有

芭蕉句碑

江戸時代に制定された「木曽八景」は、木曽の観光関係者、行政だけが知るところとなっている。「風越山」（かざこしやま）の山名も上松町以外の木曽の人々はその名前も存在も知らない。

風越山について、次に述べるように、明らかに上松町の風越山

の「歌枕」であるのに、飯田の「風越山」となっている。岩波の

『広辞苑』ですら、風越山は「飯田市の山」としている。このこ

とは半世紀以前からで、『上松町誌』の編集委員会の関係者は、

この現実を知らず『上松町誌』を作っている。教養の問題である。

中世の「歌枕」で次のように明らかに上松町の「風越山」を

詠っている歌を、飯田市の郷土史家は飯田市の「風越山（かざこ

しやま）」としている。

藤原家経の歌は「信州守にてくだりけるに、風越の峰にてよめ

る。」と詞書（ことばかき）のあとに、

風越の峰の上にて見る時は雲はふもとのものにぞありける

『詞花集』

と詠まれ、明らかに木曽上松町の風越山を詠んだものである。次の歌も「木曾の山川」とあり明らかに飯田でなく木曾の歌であることをしめしている。しかしいまでは飯田の風越山とされている。

風越や谷に夕ある白雲の中にぞ落つる木曾の山川 頓阿

○ 風越山を詠んだ歌と句 ○

木曾で昭和34年福島町の杉山箴江先生を中心に結成されたアラギ系の雑誌『檜山集』に風越山の歌が4首紹介されている。この数はきわめて少ない。詠んだ方は地元上松の方のみである。

8 飯田市の山とやわれている風越山

上松町の東南、木曽山脈の前山である風越山（1699）は、

風越より木枯吹きて冬くれど秋の実りのなやぞ豊かに

小沢よし 第1号 昭和34年

風越の緑つやめく山肌に雪のかげおつ三ところばかり

古瀬丈夫 第6号 昭和40年

風越山の肩に満月湧き出て雲の払われ冴え冴えと照る

古田澄子 第47号 平成18年

君が家の真向ひに仰ぐ風越山素枯れし傾りに冬はあまねし

伊藤てつ江 第48号 平成19年

風越山（かざこし）の裾引く野辺のすひかずら

倉上暁雲・倉上季子 句集『仙境』 昭和63年

◎ 日本一の暴れ川、滑川の土石流を治めた現代の土木技術

風越山の北に木曾前岳や宝剣岳、三ノ沢岳などに源流のある「滑川」（なめがわ）という日本一の暴れ川がある。直径5メートルもの巨岩が大音響と共に流れ下る大土石流が有史以来数百回発生している。

昭和63年日本一の砂防堰堤が完成した6カ月後の平成元年、富士山の沢崩れが1年間に崩れる20万トンという量と同じ量の土石流をわずか数時間で押し出した。

その大土石流を止め、下流の被害を防いだのが、「滑川第1砂防堰堤」である。現代の土木技術のすばらしさを滑川でみる事ができる。

滑川にさまざまな形の珍しい砂防堰堤が幾つも作られ、「滑川砂防自然博物館」といえる光景である。風越山の麓にある吉野の集落は中世以来滑川の清流を用水に利用し水田耕作をしてきた。最近木曾町の中善酒造がこの清流の水で酒米「ひとごち」を栽培し「ひとごち中乗さん」というブランドで販売している。

滑川砂防自然博物館は観光地としてあまり名前を知られていな

いが、木曾の秘められた最大の観光地である。滑川第一砂防堰堤は、日本でも最大級である。

滑川について、次の歌がある。

黄蒼咲く土手の彼方に滑川はすがしとして流れゆく見ゆ

加藤ふさ子 『檜山集』 第1号 昭和34年

滑川の花崗岩にて建てられし校門は大火に耐へて残りぬ

伊藤徳太郎 『檜山集』 第27号 昭和60年

くだつ夜の滑川べりの花崗岩月の光にかがよひにけり

昭和16年作 堀 雪野 『雪野歌集』 昭和55年

9 四代七〇余年間にわたって続いている大平街道の木曾見茶屋

妻籠宿から木地師の里漆畑から左に折れ木曾山脈山中にある大平（おおだいら）の集落を経て飯田市へゆく街道は、江戸時代に飯田と木曾を結ぶ街道であった。

漆畑から約2キロの街道脇にある「木曾見茶屋」は、昭和7年開かれ、現在まで地元の麦島家が4代にわたって店を開いている。木曾で有名な馬籠峠、鳥居峠、長峰峠など交通の重要な場所の峠の茶店はすべて廃業しているのに、ひなびた街道でただ1軒続いている茶店である。

昭和11年、歌誌『アララギ』の中心者斎藤茂吉は、木曾見茶屋で、「麓にはあららぎという村ありて吾にかなしき名をぞとどむる。」の歌を詠んだ。現在歌碑がある。

麓にアララギという村ありと茂吉詠みしは吾のふるさと

麦島松江 歌集『折戸山』 平成9年

幾曲り太平街道登り来て木曾見茶屋ありそこに歌碑建つ
三留野より太平への道すがら茂吉はアラギの歌を残しぬ

植村 功 歌集『高曾根』平成5年

太平峠の秋は浅くしてここを越えたる茂吉思ほゆ

松井芒人 歌集『統随緑集』昭和55年

あららぎの里を眼下に木曾見茶屋茂吉の歌碑をしみじみと読む

飯田敦子 『中日』平成10年3月23日

太平峠余花白き峠茶屋あり憩はばや

羚(かもしか)の見送る峠伊那へ越す

この峠越ゆれば伊奈路さびた咲く

倉上暁雲・倉上季子 句集『仙境』平成10年

茂吉の碑木曾の夏霧来て濡らす

伊東敬人 『信毎』平成7年8月16日

渡り鳥さえ木曾見の茶屋で羽根を休めて一休み

詠み人知らず 昭和10年代

五十年前と変わらぬ木曾見茶屋なつかしき茶屋の人にあって木

歩翁泣く

飯田市木歩 昭和30年代

10 近江木地師終焉の地木曾漆畑

廻転する轆轤で丸く削ってお椀など円形の器を作る職人を木地師という。南木曾町漆畑は滋賀県東近江市小椋谷を故郷とする木地師の子孫の土地で、全国に唯一ヶ所の木地師の職人の村である。伊那谷から移り住んで1世紀を超えた歴史をもつ。

妻籠宿から飯田方面へ向かって車で約20分、国道256号線の右側に水車が廻っている店が、「ヤマト小椋商店」。材料、挽く工

房、ギャラリーがあり、木地師博物館の光景である。

平成22年春には、千利久の茶室「侍庵」(たいあん)と同じ造りの茶室も復元された。復元にたずさわった方々は木曾、伊那の職人である。

小椋榮一氏の枋丸太

山眠る木地師寝かせる枋丸太

持てなしのあかぎれ見ゆる木地師の手

楯 美江 俳誌『りんどう』平成17年5月号

時雨るるや木地師工房昼灯

楯 美江 俳誌『りんどう』平成17年4月号

春焼や木地師の家の灯りあり

木曾に生れ一筋木地師新樹光

田中益子 『日本木地師学会通信』1号 平成22年

轆轤ふむ釣瓶落しの木地師村

轆轤の音水にひびきて縁立つ

内堀麦秋 句集『秋山郷』平成17年

木地師の旧村漆畑

荒れ果てし木地師の里の跡なれど心は和む来て見ることに

麦島松江 歌集『折戸山』平成9年

11 詩歌による木曾の観光ブランドの確立

短歌、俳句によって木曾の風景、地名、観光ブランドの確立。今回の私の報告の原点である。行政、観光協会の観光パンフレットで詩歌はまったく紹介されていない。

「地域資源の発掘」。「観光の振興」。選挙のたびに町村長、議員

が公約しているがほとんど空念仏である。

木曾町の木曾福島公民館が平成17年に「藤村ゆかりの地 木曾福島俳句大会」が開催された。『応募作品二覧』（17P）が刊行され、アクリル板に入選作品が印刷され建てられているが、通る観光客をみることがないと地元住民の言葉である。

詩歌による観光資源化の難しい一例である。刊行パンフレットもこの数年来、観光の産業化によってオールカラーの豪華なものが目立っている。

その観光パンフレットも地元の行政の観光担当者、観光協会が作るのではなく、「コンサルタント業者」が作っている。深味、重厚性のない木曾の観光地、観光風土とはおよそ無縁の中味のない観光パンフレットである。

私の木曾の詩歌による風景句、地名歌を、観光パンフレットに何首か入れていただき、観光客に木曾を深く注目していただく。また、学校での教材、町村報、公民館報等に紹介し、地元住民に知っていただくことが大切である。

私がここに報告した木曾の詩歌は50年間を越え歲月をかけて調査したものである。

観光ブランドの確立に是非木曾の詩歌を加えていただくその第一歩がこの報告である。

12 半世紀以上の歲月をかけた木曾の詩歌の調査

木曾の郷土を詠んだ詩歌は、大正4年の『西筑摩郡誌』を始め、木曾の郷土誌に紹介されている。昭和30年代、志波英夫先生が編纂された『村誌 王滝』は、王滝村を訪れた文人によって詠まれた詩歌が多く収録されている。木曾の郷土誌のなかで、詩歌を取

り上げたものとしては第一等の町村誌である。

毎日、中日、朝日、産経、信毎などの新聞の中に「木曾」を詠んだ詩歌を書き出し、更に昭和30年代の『木曾新聞』。平成2年発行の『木曾日報』。木曾日報に続く『長野日報』なども詩歌が多く紹介されている。

このほか木曾で刊行された『句誌』、木曾の『歌誌』。また、全国で出ている『句誌』、『歌誌』。個人の『句集』、『歌集』の中から、木曾の風景句、地名歌をノートをした。目を通した俳句、短歌は数十万首になる。

最近気になるのは、木曾に関する詩歌が少なくなっていることである。これは木曾の観光の低迷が原因ではないかと思っている。